

【用語】感状かんじょう—戦功を賞して主君などから与えられる文書 合討  
—ともに討つこと 高名—功名、戦場での手柄 神妙—殊勝、感心な  
こと 走廻—敏捷に走り勤める

【解説】北条氏ほつじょうは天正十一年（一五八三）厩橋城うまのぼりを攻略すると、翌十二年には金山城主由良国繁ゆらくにしげと館林城主長尾顕長あきながの兄弟に城の明け渡しを命じた。このため、由良氏は北条氏と激しく対立することになった。この頃、北条氏は由良氏の配下にあつた渡良瀬川流域の深沢城や五覧田城を攻撃したらしく、この戦で功績のあつた増田・大津・阿久沢・目黒らの武士たちに天正十二年二月から七月にかけて感状を与えている。これに対し、由良成繁なりしげは八月二十三日新田・桐生方面から深沢へ攻め入り、北条方の武士らと戦鬪をくりひろげた。

この文書は、深沢での由良氏との攻防で功績のあつた松井新左衛門尉に対し、九月三日北条氏直が与えた感状である。敵一人を星野新兵衛とともに討つた戦功を讃え、褒美として太刀一腰を与えていることがわかる。なお、この感状と同じ日付けではほ本文のものが須藤・尾池・目黒・前原・深沢・須浦・松井らの武士たちにも与えられている。こうして北条氏との合戦に敗れた由良氏は、その後、城を明け渡して桐生へ退去することになるのである。